

合理的にして大膽なる原則に終始して居るのである。而も是れは博士の中世史に對する見解より生ずる必然の歸結に他ならない。

文藝復興期に於ける北方嫌惡及び十八世紀に於ける中世否定の傾向より由來する謬見を打破して、中世をば特殊なる生活、ゴシック文化として認識する傾向に對して中世を古代近代に隔絶せる別殊なる生活と見ずして、古代要素と新しき生活要素との混交する生成のプロセス其物とするに、より歴史的なる見地に立脚する見方がある。植村博士は常に後者の見方を有力に代表して居られた。中世史の中心事實はローマ風ゲルマン社會の成立である。此の社會の成立は交互的である。一面に於いてはゲルマンのローマ化であり他面に於いてローマ社會のゲルマン化である。此の信條こそ正しく本篇に潜むライトモチーフであつて、本篇をして右の如き形式を採らしめた所以である。此の一見大膽なる試みは、今後の中世史研究に、尠からぬ刺激と光明とを與へるであらうと信ずるのである。

要するに本篇は古代中世轉換期に横はる諸種の錯綜せる問題を能く整理して其の間自ら著者獨自の見解を示せるのみならず、第一篇の第三章四章、第二篇の第三章及び第三篇は大體に於いて西歐史壇に充分評價さるべき新研究に屬して居る。正に坂口博士の「希臘文明の潮流」に相並んで吾が西洋史壇に永く輝くべき珠玉であらう。論評するよりも、較る據つて學ぶべきスタンダードとすべきである。(菊判四〇〇頁、價、三八〇、星野書店)〔鈴木〕

●西洋史講座

雄山閣發行

會て日本史、東洋史の講座を出した雄山閣書店では、今度その姉妹講座として西洋史講座を發行した。瀬川、大類兩博士監修の下になるもので未だ數冊を出したにすぎないが、それによつて見ても執筆者に新進の人、多數を加へ、編纂法にも特別の注意が拂はれて居るのを見る。主要部分には「古代東方諸國史」に始まり「現代史」に至る時代史であり、その他、外交、思想、宗教から音楽、建築、美術等の特殊方面をも加へて、夫々分擔諸氏が得意

の筆を振ふ筈である。別輯として大類博士、時野谷助教が「史籍解題」を受け持たれて居るのも讀者には喜ばしい。「讀史地圖」も附加される豫定である。何れ完結後更に紹介の機を得るであらう。(全十八卷、價各二、〇〇)〔猪谷〕

●西洋史概説

坪井九馬三著

往年西洋史の便利な摘要とされた舊著「西洋史要」に今回、加筆されて、版行されたものである。一讀相變らず簡明、雄勁な博士の史筆をうかぶ事ができる。卷末歐洲大戰の結末を叙して「ウイルム二世蒼惶オランダに奔り、十一日ドイツ休戦し、十四日ボーランド自立してエウロバの大亂戦る。是に於てエウロバの三帝國悉く亡ぶ」の如きである。古代エジプトに始まり今世紀初頭の社會説の流行から、歐洲各國の情勢を述べ大戰の結末迄に至つて居る。

原語表を加へ、地圖、寫眞版も多數挿入してあるが、惜しい事に寫眞版の大部分の印刷が鮮明を缺いて居る。

〔菊判三八七頁、白林社發行、價三、七〇〕〔猪谷〕

●滿洲地誌研究

田中 秀作著

近年我が國の人口食糧問題が強く論議さるゝに至るや、地理的歴史的に我が國と最も緊密なる關係に立つ滿洲が、朝野識者の間に着目さるゝに至つたことは、もこより當然の歸結であること云はねばならぬ。然るに本地方に就いては南滿洲鐵道株式會社その他により個々の事象に關する調査の詳細なるものが多々發表されたけれども未だ國民の海外發展に充分な素地を與ふるに必要な纏つた地理書がなかつたことは我々の最も遺憾とする所であつた。これ我が國の地理學者が時日の制限を受けてこの廣大なる地域に就いて臨地研究をなすことの困難なるのみならず、匪賊等の危險があるから、また止むを得ぬことでもあつた。爰に多年滿鐵調査課に奉職され現に彥根高商教授たる田中秀作氏に依つて滿洲地誌研究が公にされたことは、最も意義深きものたること共にまた其の人を得たものと信するのである。